

文春文庫

盛 装

(下)

井 上 靖



文 藝 春 秋



文春文庫

104—20

盛装(下)

定価 420円

1980年9月25日 第1刷

著者 井上靖

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文 春 文 庫

盛 装

(下)

井 上 靖



文 藝 春 秋

内容目次

夜（承前）

7

落葉

26

パーティ

55

富士

85

半島

117

決意

154

梅

198

だるま市

234

嗚咽

279

夜桜

298

春の装い

322

《解説》

福田宏年

357

盛
裝
(下)

夜（承前）

伏木はホテルで安原と早見に別れて、ひとりで家に帰った。伏木はひどく腹を立てていた。瑟子が無断で家に帰ったということより、その事件に依って、たとえ短い時間でも心配させられたことが腹立たしかった。

伏木は家の玄関を開けた時、上がり框がまちのところに、索子と瑟子が自分を出迎えているのを見た。「お帰りなさいませ」

索子が言うのと、

「ううむ」

と、不機嫌に頷うなずいて、伏木は靴を脱ぐために身を屈かめようとした。併し、身を屈めることが苦しかったので、立ったままで靴から足を抜はこうとした。

それを見ると、瑟子がすぐ土間に降り立って来て、身を屈めて、靴の紐を解いてくれた。

「これで脱げますわ、ほら」

瑟子は言った。

「スリッパを出さんか」

伏木が言うのと、

「ここに出ております」

瑟子が少し離れたところにあるスリッパを取って、伏木の足の前に揃えて置いた。

「いつものスリッパとは違う」

伏木が文句をつけると、

「あれ、もう大分疲れましたので、新しいのに替えました」

瑟子が答えた。

「前のを持って来てくれ。あの方が、履きなれていていい」

伏木が言った時、

「うふ」

と、索子は笑い声を出して、

「御機嫌が悪い時は、何をしても駄目よ、瑟ちゃん」

「何！」

伏木が息巻くと、それを受け付けなくて、

「瑟ちゃんもずいぶん方々探したんですって。お供が三人も居るのに、一体何をしていたんでしよう、ねえ」

その索子の言葉には非難の調子がこめられてあった。

「お前には判らん」

伏木が言くと、

「瑟ちゃん、あなた、二階へ行っていらいっしょい」

索子が命じるように言った。瑟子は言われるままに、二階への階段を上がって行った。

伏木は居間へはいると、

「ばかめが！急に居なくなつて、
すると、索子が、」

「事情はよく知りませんが、あの子、気が立っていますから、お憤りになつては駄目」

と、真顔で大きく首を横に振つてみせた。その索子の顔を見ると、伏木は急に表情を改めて、

「何か、様子がおかしいか」と訊いた。すると、

「何か、ありましたの？」

と、逆に索子が訊いて来た。

「何が何だか判らん。ホテルで、急に居なくなつただけだ」

伏木は答えた。

伏木は居間に胡床あぐらをかいて坐ると、上着を脱ぎ、ネクタイをとった。やたらに腹立たしい感情が物悲しく渦を巻いていた。

「ここで、そんな顔をなさつてらっしゃらないで、びしびし瑟子におっしゃたらいいと思います。自分の娘なんですから」

伏木の着物を持つて来た索子が立ったままと言つた。伏木は黙っていた。

「瑟子のことでお憤りになつても、いつもわたしに辛く当るだけですわ。本人におっしゃればよろしいのに、本人には何にも言えないじゃありませんか」

「それは、俺の言うことだ」

伏木はワイシャツを脱ぎながら言つた。

「君こそ、瑟子をかばっているじゃないか。瑟子の顔色ばかりうかがつて、びくびくしている。」

自分の娘が非常識なことを仕出かしたら、きびしく叱るのが母親の勤めだ。瑟子は氣が立っているから、何も言わないでくれと言ったのは、君だろう」

「そう、わたしが言いました。何も事情が判らないから言っただけです」

「いまは事情が判った筈だ。判ったら叱った方がいい」

「御自分で叱ったらいいいじゃありませんか。厭な役をひとに押し付けて、ずるいったらありはしない」

索子は言った。そう言われれば、その通りであった。

「よし、二階へ行ってくる」

伏木は立ち上がって、ズボンを脱ぐと、着物に着替えた。そして、

「茶を持って来てくれ。茶を飲んでから二階へ行く」

索子は居間を出て行ったが、すぐ伏木が毎日使っているおおぶりの湯呑茶碗を持って来ると、

「どうぞ」

と言って、茶碗を伏木の前へ置いた。伏木は茶をひと口に飲むと、

「甘い顔ばかり見せていると癖になる」

そうひとり言のように言った。

「どうか、その氣持が挫けませんように」

索子は皮肉な顔で言った。

「何！」

「早くいらした方がいいと言ったんです。氣が変らないうちに」

「よし」

引っ込みがつかない気持で、伏木は立ち上がった。庭の芝生の一部が室内からの電灯の光で、色つけでもしたようにひととき青く見えている。

なぜ自分はこんなに憤っているのであらう、——伏木はふと自分の心の内側を覗くような気持になった。瑟子がホテルで何の理由もなく自分たちから離れたのでないことは自分にも判っている。瑟子を手我夢中であそこから飛び出させたものが、あの時あそこにはあったのだ。それは何か判らないが、そうしたものがあそこにあったことだけは確かなのだ。瑟子に対して、そのような力を持つものがこの世にあるということが、自分は腹立たしいのかも知れない。

伏木は階段を昇って行くと、瑟子の部屋の前に立った。

伏木は扉をノックした。

「はい」

すぐスリッパの音がして、扉は内側から開けられた。

「あ、お父さん！」

母親の索子だと思っていたらしく、瑟子はすぐ扉を閉めると、

「ちょっと待って下さい」

と言った。ベッドの上でも散らかっていたのであらう。忙しくスリッパの音がしていたが、やがて、

「どうぞ」

と言う声と一緒に扉が開けられた。

いかにも娘の部屋らしい華やかさが、伏木には少し眩しかった。と言つて、特に派手に飾り付けがしてあるわけではなく、どちらかと言えば殺風景な部屋であった。色のついているものはカ

―テンとベッド・カバーぐらいのものである。

「なかなかきれいにしてあるじゃないか」

伏木は部屋を見廻して言った。

「この部屋へおはいりになったこと、ありませんでしょう」

「うん。着るものはどこに仕舞ってある？」

「ここが洋服簞笥になっています」

瑟子は部屋の隅に行つて、洋服を入れてある戸棚の扉に手を置いた。

「寒くないね」

「ええ。寒くなったら小さい電気ストーブを入れますから」

瑟子は言った。

伏木は窓際の机のところにある椅子に腰を降ろした。瑟子はベッドのところに立っていた。

伏木は今夜この機会に、何もかも瑟子から訊き出そうと思つていた。心中未遂事件を起した娘に対して、これまで何一つ、訊くといつた訊き方では訊いたことはなかった。腫物にでもさわるような気持で、伏木も索子もそのことを避けていた。訊かないでもすめば訊かないでもよかった。訊いたからといって、起つてしまった事件がどうなるというものでもなかった。併し、今夜のようないふことがあるとすると、瑟子の心はまだ事件の痛手から完全には癒つていないことになった。やはり、親として自分の娘の心の内部がどのようなものになっているか、一応知っておくべきだと思われた。

伏木が机の上の小さい置時計を取り上げると、

「それ、眼覚しですよ」

瑟子が説明を加えた。その時、索子が紅茶をいれて運んで来た。

「お父さんが大変な見幕で上がっていらしたんで、どんなことになっているかと思って見に来たんですが、大変静かですわね」

索子が皮肉を言うのと、

「つべこべ言わないで階下に降りてなさい」

伏木はいままで瑟子と話していたとはまるで異なった口調で言った。

「瑟ちゃん、お父さんがあなたにお話があるんですって」

調子をつけた言い方で、索子は言うのと、すぐ部屋を出て行った。その索子の言葉は伏木には当てつけがましく聞こえた。

伏木としては、こうなったら切り出す以外仕方なかった。義理に紅茶茶碗を口に運んでから、
「今夜、ホテルで何かあったね」

と、穏やかに口を開いた。瑟子のはつとしたように顔を上げたが、忽ち^{たちま}にしてまた顔を伏せ、そのまま暫く黙っていた。

「何かあったんだと思うね。どうも、あの消え方は普通じゃない。誰かに会ったんだね。別に匿すには当らんだらう。言ってごらん」

伏木は瑟子の顔を見守っていた。なかなか口を開かないところは、強情に見えた。と、瑟子は顔を上げ、

「会いました」

と言った。

「誰に会った？」

「早見さんが話していた女のひとです。向うでは気付かなかったかも知れませんが、わたしの方はすぐ気付きました」

「ふむ」

瑟子の言葉は伏木には意外だった。伏木は黙って瑟子の口から出る次の言葉を待っていたが、
「それで、——？」

と、次を促すように言った。

「自分でも知らないうちに逃げ出していました。夢中で階下のフロントの前まで行って、そこで気付いて、よほど六階へ戻ろうかと思いましたが、丁度タクシーが来たのが見えたので、それに乗ってしまいました。途中で電話をかけようと思ったんですが、——」

それを遮って、

「電話のことは、まあ、どうでもいい」

伏木は言うのと、

「どうして逃げ出したの？」

「」

「何か理由がなかったら、人間、逃げ出さんだろう。構わないから、何でも言ってごらん」

「嫌いなんです、あのひと」

「嫌い!? 一体、どういう女のひとかね」

「四条さんという舞台装置をやっているひとの奥さんです」

「なるほど」

「」

「で、——？」

「それだけです」

「それだけなことはないだろう。幾ら嫌いなひとに会ったと言っても、ただそれだけの理由では逃げ出さんだろう」

「本当にそれだけなんです」

「子供を騙すようなことを言っではいかん」

「でも、それだけです」

「ふむ」

「わたし、あの時どうかしていたんです。いま、後悔しています。逃げ出さなくてもよかったんです。それを、つい夢中で逃げ出してしまいました。後悔しています」

「後悔する、しないは君の勝手だが、もう少し納得の行くように話さない。あの女のひとは、君が前に仕出かした事件に何か関係があるひとか」

伏木は、紅茶茶碗を取り上げて喉を濡らした。

瑟子は寝台に浅く腰かけ、手を膝の上に置いて俯うつむいていた。いかにも神妙だった。

「お父さんは、まだ君が仕出かした事件の意味というものは何も知っていない。父親として、自分の娘が仕出かした事件がどういうものか知らんということは、普通の常識からすれば通らんことだが、別にあわてて訊き出す必要もないと考えていた。事件が事件だから、君の方もそれに触れられるのは厭いとだろうと思って、そんな心遣いもあって、いままで黙っていた。併し、今日は訊く。一応判るように話してくれ。事件の起った直後、T市の旅館に泊ったが、その翌朝、君は言った。本当は相手のひとは何でもなかった。心中ではなかった。そんな風なこと言ったね。あ